



(財) 広島平和文化センター  
Hiroshima Peace Culture Foundation

〒730-0811 広島市中区中島町1番2号  
TEL(082)241-5246(代表) FAX(082)542-7941 E-mail:p-soumu@pcf.city.hiroshima.jp  
平成22年(2010年)6月/年3回発行 [URL]http://www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/

## 2010年NPT再検討会議を終えて：今後の展開



本財団 理事長  
スティーブン・リーパー

核拡散防止条約(NPT)締約国が二〇一〇年の条約の再検討を終えました。

広島、長崎、平和市長会議、Yes!キャンペーン実行委員会はもとより、多大なるご支援をいただいたYMCA、YWCA、全国の生協の皆様は、NPT再検討会議(以下、再検討会議と記述)に向けて世論を高め、前向きな結果を得るために働きかけるなど、しかるべき役割を果たされたことをさぞかし誇りに思われていることでしょう。

再検討会議で日本は中心的な役割を演じていますが、それは政府ではなく市民だったのです。世界中のNGOコミュニティは、再検討会議のカバクトゥラン議長に、核兵器廃絶を求めめる千五百万筆もの署名を提出しています。この目を見張るような数字は、草の根からの核兵器廃絶に対する切実な願いの表れであり、これらの署名の大多数は日本で集められたものです。実は、その他の地域からの署名も、日本の署名運動がきっかけなの

### 目次

2010年NPT再検討会議を終えて：今後の展開.....	①～②	平和記念資料館資料調査研究会 研究報告第6号発行／「被爆体験証言者交流の集い」研修会を開催／被爆体験の継承にご協力を.....	⑨
2010年NPT再検討会議後の広島と核廃絶.....	③	追悼平和祈念館企画展を開催中.....	⑩
2010年NPT再検討会議に市長代表団が参加.....	④	第10回「ヒロシマ・ガイド」を開催／国際交流員からのメッセージ.....	⑪
被爆体験記「消された街、広島」.....	⑤	「国際理解セミナー」を開催／バングラデシュNGOメンバーの受け入れ.....	⑫
ニカラグア訪問及び第78回全米市長会議冬季会議出席／		平成21年度「資機材の供与」／「留学生と地域のみなさんとのふれあいコンサート」を開催.....	⑬
全米における原爆展 フォローアップ結果報告.....	⑥	留学生会館「新規入居者を迎えて」／Yes!キャンペーン実行委員会活動報告.....	⑭
国際基督教大学の「広島・長崎講座」現地学習／		平和について思う「広島の地であらためて平和について考える」.....	⑮
ミネソタ州立大学の「広島・長崎講座」現地学習.....	⑦	平成21年度 海外からの来訪者が発信するメッセージ.....	⑯
「佐々木雄一郎写真展 第2部」を開催中.....	⑧		

です。日本のおかげでこのように署名が集まったのです。

二千人から三千人の日本人がはるばる海を越えてニューヨークに渡りました。再検討会議に先立って、五月一日に大きな会議が、二日に平和行進と集会が開催されました。世界から二万から二万人が参加し、盛大な行事になりました。日本人がいなければ、これらは実現しなかったことでしょう。

世界の核兵器との戦いは、日本人が主導しているという間違いない事実です。先頭にヒバクシャ、そのすぐ後に秋葉広島市長、田上長崎市長、日本から他に四人の市長、続いて平和市長会議の大派遣団が歩いたのです。前日のNGO会議では、潘基文国連事務総長のスピーチに続いて、秋葉市長が閉会のスピーチを行いました。ニューヨークに滞在した十日間、秋葉市長は少なくとも十五カ所で主要なスピーチを行っています。田上市長も大活躍でした。しかも、五月四日に行われた平和市長会議は、国連事務総長がスピーチをした二つのNGO主催会議の一つだったのです。もう一つは、我々とも緊密に連携している核軍縮・

不拡散議員連盟(PNND)主催の会議でした。事務総長は秋葉市長、田上市長、平和市長会議の発揮するリーダーシップを評価して登壇されたのであり、引き続き成果を期待していることを明言されたのです。

平和市長会議、世界のNGO、多くの日本人が一丸となって、外交官たちに猛烈に働きかけ、その結果、再検討会議第一委員会(核軍縮)の出した最初の合意文書草案は驚くほど強い表現になりました。それは、核兵器のない世界へとつながる交渉プロセスの即時開始を求め、核兵器のない世界の表現に反するすべての活動の即時停止を求めるものでした。二〇二〇年までの核兵器廃絶を提案するものではありませんでしたが、廃絶の緊急性を繰り返し述べ、期限の設定が望ましいと言いつつ切っていました。さらに、二〇一四年に全世界で核兵器禁止条約を実現する交渉に入るべく、核保有国に二〇一一年に交渉を開始することを求めていました。これらの記述は、「ヒロシマ・ナガサキ議定書」を意識しているように思えます。また、日本政府による最初の演説でも、この議定書

について言及していません。秋葉市長やYes!キャンペーン実行委員会が先頭に立って進めた、この議定書を推進する日本での強力なキャンペーンが、再検討会議に一方ならず影響を与えたことは疑う余地もありません。

今回の再検討会議でまとめられた最終文書も、それほど残念なものではありません。最終文書を出すことができたのは、潘事務総長や世界のリーダーたちの協力精神の賜物です。最終文書には「世界の国は核不拡散体制を強化し、核兵器を廃絶することへの決意を再確認した」とはっきり述べられています。

最終文書の行動計画の最初の項目には、全ての国が、「核兵器のない世界」というゴールに即した核政策をとることが規定されています。言い方は遠まわしですが、これは、まぎれもなくヒロシマ・ナガサキ議定書の第一条と同じ内容です。さらに、最終文書の中に「核兵器禁止条約」という言葉が二度も出てきたのですが、これは前代未聞のことです。この条約はヒロシマ・ナガサキ議定書の第二条で規定している内容のもので、これらの成果は私たちが

期待したものには及びませんが、意味がないと片づけることはできません。国際社会が一体となって全力を尽くし、軍縮への動きを作り出し、かつてなく意義のあるステップを、小さいながらも踏み出したということなのですから。

他方で、核保有国は猛反発し、①核兵器のない世界につながる包括的プロセスの実施、②核兵器禁止条約や早期の交渉開始、③核兵器に関わる行動の停止、④期限の言及、等を約束する項目の削除を求めています。なぜでしょうか？

残念ながら、この結果から多くの人が出した結論は、核保有国は、核兵器を廃絶することを本気で考えていないということです。非核保有国が再検討会議からこのメッセージを受けとったとするなら、一部には、自らの核兵器を取得し、実験し、配備する準備を始める国も出てくるかもしれませぬ。

この動きを抑えるためにも、私たちは今回の再検討会議の最終文書を踏み台にして、都市や市民がキャンペーンを拡大し、働きかけを強化しなければなりません。

政府が核兵器のない世界を実現できないのであれば、私たちが実現しなければなりません。これには皆さまの協力が欠かせないのです。

地雷禁止キャンペーンが成功したのは、故ダイアナ元皇太子妃が、メディアを通してキャンペーンのメッセージを送ることができ十分な資金を得る後押しをしたからです。核兵器廃絶キャンペーンは、広報活動が十分でないため低迷しています。これは資金がないからなのです。

平和市長会議は七月二十七日から二十九日まで広島で会議を開催します。この会議が、グローバルな大きなうねりとなるキャンペーンの公表のチャンスとなることを願っています。皆さまが会議に参加し、我々がゴールを達成できる後押しをしていただきたいと思います。どのような施策をとっても、効果的にキャンペーンを続けるためには、今よりもはるかに莫大な資金が必要になります。どうか、みなさまのご協力をお願いいたします。

協力の方法については、左記をご覧ください。ご協力をお願いします。

www.mayorsforpeace.org



**プロフィール**  
 (みずもと かずみ)  
 1957年広島市生まれ。1981年、東京大学法学部卒業。朝日新聞社入社後、1989年、米国タフツ大学フレッチャー法律外交大学院修士課程卒業。ロサンゼルス支局長を経て1998年、広島市立大学広島平和研究所助教授。2010年から現職。専門は国際政治・核軍縮。

## 2010年NPT再検討会議後の 広島と核廃絶

広島市立大学 広島平和研究所 教授  
**水本 和実**



ニューヨークでの平和行進  
 (今年五月のNPT再検討会議時)

五月にニューヨークで開催された、五年に一度の核不拡散条約(NPT)再検討会議は、核廃絶へ向けた六十四項目の行動計画を盛り込んだ最終文書を全会一致で採択し、閉幕しました。

今回の再検討会議は、核をめぐる今後の情勢を左右する重要な試金石だったと言えます。なぜなら、二〇〇九年四月にオバマ米大統領がブラハ演説で「核のない世界」を訴えて以来、核廃絶への期待が国際的に高まる一方、米国を含む核保有国がどこまで核廃絶に真剣に取り組み意図があるのか、依然として不透明だからです。

### 及第点の再検討会議

結論から申し上げるなら、今回の

結果は、画期的といえるほどではありませんが、及第点はクリアできたと思います。

前回の再検討会議は、核軍縮に背を向けた米ブッシュ政権の姿勢を反映して、何ら成果なく終わりました。しかし今回は、一九九五年と二〇〇〇年の再検討会議で積み上げてきた、包括的核実験禁止条約(CTBT)の実現や、核保有国による「核廃絶への明確な約束」など、核軍縮に関する決定を全て継承しつつ、核廃絶をめざすことが確認されました。また二〇一四年のNPT準備会合で核保有国が核軍縮の進み具合を報告する「中東に非核・非大量破壊兵器地帯をつくるための国際会議を二〇一二年に開催する」などの新たな措置が盛り込まれたほか、核兵器

禁止条約の意義についても、初めて言及されました。

一方、実施期限を明記した核削減計画を盛り込むという非核国の意向は、核保有国側の反対で退けられませんでした。

### 決裂回避の意義は大きい

とはいえ、最終文書を採択できた意味は小さくはありません。今回の再検討会議には、ウラン濃縮活動を継続して国際社会から批判を浴びているイランのアフマディネジャド大統領が自ら参加して演説を行い、対米批判を繰り返しました。イランがこうした強硬姿勢を続ければ会議は決裂の可能性もありましたが、アラブ諸国の団結により、イランも態度を軟化させました。会議を決裂させなくてはならないと考えた良識派の声が上がったのです。

### 広島はどう受け止めたか

今回の再検討会議の結果についての広島を受け止め方は、二通りあると思います。一つは、まがりなりに最終文書が採択されたことへの安堵感でしょう。もう一つは、今回も核廃絶の達成期限を明記した実施計画が示されず、核廃絶実現が先送りされたことへの失望感です。

特に広島市長が会長を務める平和市長会議は、二〇一〇年までの核廃絶を明記した「ヒロシマ・ナガサキ議定書」の再検討会議での採択をめざし、市民の協力も得て大きなキャンペーンを展開しました。再検討会議のNGOセッションで広島・長崎両市長が演説したほか、被爆者を含む数多くの広島・長崎市民がニューヨークを訪問し、多彩な活動を繰り広げました。それだけに、複雑な思いを抱いている人も多いでしょう。

### 今後も一言一憂せず行動を

しかし、各国代表に広島・長崎の切実な思いは伝わったと思います。また被爆地の運動に日本の外務省はこれまで一定の距離を置いてきましたが、福山哲郎・外務副大臣は再検討会議での演説で「ヒロシマ・ナガサキ議定書」に言及し、市民社会の努力を積極的に評価しました。

市民の行動と各国政府の外交交渉は、もともと次元が異なります。市民は理想を求めますが、外交は妥協なしには成立しません。そのどちらも重要です。そのことをふまえて、これから一言一憂することなく、しかし決して諦めないで行動していくことが、広島・長崎に求められています。

# 二〇一〇年NPT再検討会議に 市長代表団が参加



今年五月にニューヨーク（米国）で開催された第八回NPT再検討会議に、平和市長会議加盟都市による市長代表団（十カ国三十都市八十九人）を組織して参加し、NGOセッションでのスピーチや核保有国代表との協議を通して、二〇一〇年までの核兵器廃絶の実現に向けた取組の実施を訴えるとともに、多くの平和NGOやニューヨークに集結した世界の市民との連携を強化し、核兵器廃絶の国際的気運の醸成を図りました。

**四月二十九日（木）三十日（金）**  
秋葉市長は非核兵器地帯条約に関する市民社会フォーラムと、非核兵器地帯条約締結国による会議に出席し、核保有国首脳の高島、長崎訪問や、二〇一〇年までの核兵器廃絶に向けた一刻も早い交渉開始を訴えました。

**五月一日（土）**  
平和NGO主催会議「核のない平和

で公正で持続可能な世界のために」の分科会「都市の役割」に出席し、秋葉市長が、「核兵器廃絶は今の世代が責任を持って解決すべき問題である」と訴えました。また夕刻には同会議の最終全体会が行なわれ、潘基文国連事務総長が核軍縮は最優先の問題であること、八月に広島を訪問することなどを述べられました。秋葉市長も、世界の指導者は被爆者と直接対面し、心からの願いに耳を傾けるよう要請しました。会議の合間に、バッテリーパークにある同時多発テロ事件慰霊のモニュメントを訪問して献花を行いました。

**五月二日（日）**  
平和集会及び平和行進に参加し、集會では秋葉市長ほか平和市長会議の代表が、平和の火と平和市長会議の横断幕を掲げて、高齢化する被爆者が存命のうちに、二〇一〇年までに、核兵器廃絶を実現させよう、と訴えると、聴衆は大声援で応えました。その後、約

二万人と共に国連前まで行進しました。行進後には、NPT再検討会議議長と国連軍縮担当上級代表に、ヒロシマ・ナガサキ議定書への都市首長賛同署名千五百七十七筆と「都市を攻撃目標にするな（CANNT）プロジェクト」の市民署名百二万四千八百二十筆の一部を手渡しました。

**五月三日（月）**  
NPT再検討会議開会式を傍聴した後、爆心地復元映像上映会に出席しました。また、平和市長会議の二〇一〇ビジョンキャンペーン協会役員会を開催し、今後のキャンペーンの展開について協議したほか、国連本部で開催された広島長崎原爆展の開会式に出席しました。夜には、ユニオンスクエアの公園の一角にロウソクを灯して被爆者の証言を聞く会に参加し、主催者を激励しました。

**五月四日（火）**  
国連本部で平和市長会議主催会議を開催し、潘基文国連事務総長を基調講演者として迎えました。潘事務総長は、「今こそ全面的な核軍縮を行う時」と訴えると共に、広島を平和記念式典に参列することを改めて表明しました。それに心懸て秋葉市長が市民社会は潘事務総長とともに努力すること

を約束し、最後に平和記念式典参列者が折った金色の千羽鶴を手渡しました。また国連総会議場において、五月二日に続き、二回目の平和関係署名提出の機会を得ました。午後には、自治労連「二〇一〇自治体労働者の集い」や、国際労働組合総連合主催会議、さらにニューヨーク市立大学等が共催する平和に関する学術会議に出席し、平和市長会議加盟都市が約四千に増えていることを紹介するとともに、「核廃絶は喫緊の課題であり、今すぐ行動しなければならぬ」と訴えました。

**五月五日（水）**  
世界宗教者平和会議の会合に出席し、「世界の市長たちと共に平和な世界を

築いていこう」と呼び掛けました。午後には、フランス軍縮大使に面会し、フランスの政策について意見交換を行ったほか、核不拡散・軍縮議員連盟主催会議に出席しました。

**五月六日（木）**  
中堅国家構想の執行委員会に出席し、今後の活動方針等について協議しました。また夕方には、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア非暴力センター主催のレセプションに出席し、平和市長会議の活動を紹介しました。同センターからは、秋葉市長と田上長崎市長に対し「ワールド・ハーモニー賞」が授与されました。

**五月七日（金）**  
米国大統領特別代表（核不拡散担当）と面会し、意見交換を行った後、NPT再検討会議の公式プログラムである「NGOセッション」に出席しました。このセッションでは、各国政府代表等約四百名の出席のもと、平和市長会議をはじめとするNGOの代表が意見を述べました。秋葉市長は、高齢化する被爆者が存命のうちに核兵器を廃絶するためにも、二〇一〇年という期限を定めて核兵器廃絶に取り組むことが非常に重要であると訴えました。



潘基文事務総長（写真中央）に金の折り鶴を手渡す秋葉市長



**プロフィール**  
 (せぎ まさたか)  
 昭和9年10月28日生。満10才の時、爆心地から南東1500メートルの舟入幸町の自宅で被爆。平成5年10月に広島被爆者援護会を設立し、現在まで理事長を務める。平成7年に胃癌の手術。平成8年に特別認定被爆者に。妹2人は白血病で、弟は肺癌で死亡。母は5ヶ所に転移した癌で死亡。

被爆体験記

消された街、広島

peace  
 広島被爆者援護会 理事長

瀬木 正孝

学童疎開

昭和二十年四月、舟入国民学校から双三郡十日市国民学校に転校。三才の妹、二年の弟、小五の私は祖母の家（現在の三次市）に疎開。戦争が終らないと、父母兄弟に会えないという思いから、八月五日、弟と二人で広島に逃げて帰り、父に叱られた。思い出です。

広島が「ヒロシマ」に変えられた日

八月六日朝、警戒警報で起き、二階から下に降りると、父は仕事に出て行くところで、私を見ると「今日おばあさんと一緒に帰れ」と言っていて出て行きました。これが父を見た最後となりました。朝食を喰べ終り、母は近所に用があると出て行き、私は中庭にあった錦鯉の池のほとりに立った時、天地を引き裂く様な白光が走り、ほぼ同時にガンと強烈な音。次に私が気付いた時は、南に十メートル余り飛ばされ、上からバラバラと落下して来た物で頭を負傷し、出血しておりました。兄は背中一面にガラスが突き立っておりましたが、幸い弟と妹はかすり傷もしていなかった様です。外



元安川を流れる死体  
 (「市民が描いた原爆の絵」池亀春男さん作)

出していた母は体の正面から二度近い熱線を浴びて、大火傷を負って苦しんでおりました。

その夜、近くの畑の中で近所の人達六七十人と、広島全体が大火災となっているのを茫然として見ているだけでした。

翌七日、江波国民学校の救護所に入り、「赤チン」で消毒するだけの治療。母が腫れ上がった顔で私に「お前は元氣そうじゃけえ家の方に行ってお父さん帰っていないか見て来て」と言うので、昼前から自宅の焼け跡を探して瓦礫の中を歩きました。どこに立っても「ヒロシマ」中が見渡せました。そんな

中、目にしたのは、ポツン、ポツンと黒ずんだビルが立っている光景でした。広島と言うのは狭い街だったんだなあ、と思いました。私の家も完全に焼けており、何一つ残ってありません。それから父を探して舟入、観音、天満、己斐、横川と歩いていると、「僕これを喰べんさい」と言って救護隊の女の人がおにぎりをくれました。

人間が、人間としての心

貰ったおにぎりを喰べ乍ら、ゴロゴロと転がっている死体をまたいだり、瓦礫の下の死体を踏みつけても、気にもせず平気でいられたこと、これが戦争の怖さであります。戦争というのは人間の心と、精神を破壊するから、この時、私は人間としての心を持っていないかったのだと思っております。その後、暗くなる迄歩いて探しました。

死体の中で動いた手

八日の朝から父の勤めていた広島県庁に向かった。川にはあちこち死体が浮かんでいる。まだ救護活動が始まって二日目のことだから、多くの死体があるのは当然です。中島町にあった県庁も瓦礫と化していました。何気なく南東の

方を見ると、日赤病院の塔が見えました。被爆して負傷した多くの人は、この塔を「命の塔」と言っていたと聞いております。父もそこに居るかもと思って、私も日赤の横門から入り、たかさんの負傷者の中を歩き、二階、三階の病室も覗きました。父の姿はありませんでした。仕方なく正面玄関に出ると、円形の築山があり、そのまわりに、何も着ていない黒く腫れ上がった死体が放射線状に五段、六段と重ねてありました。

父の顔がないかと死体を覗きこんで、ぐるりとほぼ一廻りしかけた時、一番下の方から一本の腕が空に向かって突き出ておりました。他の死体にくらべてその腕は妙にやせほそっていたので、ふとその手を見ると、指が力無く動き、何か掴もうとするように見えました。それから時々夢に出てくる様になりました。

語り伝えることの大切さ

私に残された時間はあまりないでしょう。だからこそ次世代を担う若人にお願したい事です。一人、一人が思いやりの心を持って、自分をふくめて人間の命の大切さを多くの人に伝えたいと思います。

# ニカラグア訪問及び第七十八回全米市長会議冬季会議出席

加盟都市が急増した中米ニカラグアを訪問し「二〇二〇ビジョン」(核兵器廃絶のための緊急行動)への今後の更なる協力を要請するとともに、平和市長会議の活動に賛同し五回の支持決議を行っている全米市長会議の冬季会議(ワシントンDC)に出席し、NPT再検討会議の成功に向けた都市の力の結集を呼びかけるとともに、米国政府に対し、核兵器のない世界の実現に向けNPT再検討会議で主導的な役割を果たすよう働きかけました。

**一月十六日(土)から十八日(月)**  
ニカラグアの首都、マナグア市をはじめ、レオン市、エステリ市、マタガルパ市を訪問しました。それぞれの都市では、市長たちと意見交換をしたほか、「市の鍵」贈呈式に出席しました。また、レオン市では、旧レオン市から新レオン市への移転四百周年記念式典に出席しました。式典では、国民的詩人の名を冠し、国内外の文化貢献者に与えられる同国最高の荣誉である「ルーベ



ルーベン・ダリオ文化独立勲章授与式でのオルテガ大統領と秋葉市長

ン・ダリオ文化独立勲章」の授与式も開催され、オルテガ大統領から秋葉市長に対し、勲章が授与されました。秋葉市長は、各訪問先でスピーチを行い、世界の多くの都市が困難な歴史を共有していることや、各都市の努力が三度目の原爆使用を防いでいることに謝意を述べると共に、二〇二〇年までの核兵器廃絶に向け、世界の指導者たちと協力していくことと呼びかけると、大きな賛同を受けました。十八日には、オルテガ大統領御夫妻と面会し、平和市長会

議の活動の説明や協力をお願いすると、大統領は、原爆の話は子ども時から聞いており、是非日本を訪問したいと考えていることや、ニカラグアとして核兵器廃絶の実現に向け協力したいと述べられました。

**一月二十日(水)から二十一日(金)**  
ワシントンDCでの全米市長会議冬季会議に出席し、ミシェル・オバマ大統領夫人の講演を傍聴したほか、秋葉市長は挨拶で、米国の市長が地球的な問題解決のために世界を先導してきたこと、平和市長会議の加盟促進の上でも米国が重要である旨を述べ、NPT再検討会議までに加盟都市を五千に増やすための協力を要請しました。また広島・長崎にオリンピックを招致する可能性を検討していることも紹介し、核兵器のない平和な世界を子供たちに残していくため共に努力しようと呼び掛けました。さらに、オバマ大統領とホワイトハウスで面会し、秋葉市長が「ぜひ、広島に来てください」と声をかけると、大統領は「行きたいと思います」と返事をされました。そのほか、国会議員や政府高官とも面会し、核兵器廃絶に向けた取組についての意見交換を行いました。

(平和連帯推進課)

# 全米における原爆展「フォロアップ」結果報告

世界の核政策の動向を握る米国の市民に原爆被害の実相を伝え、核兵器廃絶の世論を高めるため、昨年四月から今年三月にかけて米国で原爆展を開催しました。(主催ー現地の団体 協力ー広島市、本財団、長崎市、長崎原爆資料館)

この原爆展は、平成十九年度から二十年度にかけて、四十八州百十三都市で実施した「全米における原爆展」に引き続いて開催したもので、会場の都合等で二十年度末までに実施できなかった都市を中心に開催しました。

それぞれの会場には、原爆被害の実相などを伝える写真ポスターを展示するとともに、これまで行ってきた証言者の派遣に加え、ウェブ会議システムによる被爆体験証言を配信し、ヒロシマのメッセージを伝えました。

被爆体験証言を聴くのは初めてという人も多く、来場者からは「原爆を投下したアメリカを憎いとは思わないか」「どのようにして助か



ウェブ会議システムにより、コネチカット州ニューヘブンの会場を結び実施した被爆体験証言

質問が寄せられたり、辛い体験を話してくれた証言者に対する感謝の言葉などが聞かれました。

また、本財団のリーパー理事長が、「私たちはアメリカの過去を非難するためではなく、共に核兵器廃絶に向けて行動してもらうために活動している」と原爆展の目的を説明し、核保有等の現状について話すと、来場者からは、「具体的に今私たちに何ができるのか」等の前向きな質問も寄せられました。

平成二十一年度の原爆展開催実績は、十八州二十八都市です。「全米における原爆展」の実績を加えると、三力年で、五十州百二十九都市で開催しました。

(平和記念資料館啓発担当)

## 国際基督教大学の「広島・長崎講座」現地学習 世界各国からの留学生が被爆地で学ぶ

広島市と長崎市では、被爆者の「他の誰にも同じ思いをさせてはならない」というメッセージに込められた平和への「思い」を学問的に整理・体系化し、普遍性のある学問として若い世代に伝えるため、世界の大学での「広島・長崎講座」の開設・普及に取り組んでいます。

こうした中、同講座を開設している国際基督教大学の一行が、三月三日（水）と四日（木）の両日、当センターを訪れました。

参加者は、アメリカに本部を持つロータリー財団により世界各国で選抜され、国際基督教大学の修士課程で平和研究を専攻している留学生七名で、当地での現地学習は、二〇〇三年から実施しており、今回が八回目となります。

一日目は、広島平和記念資料館を見学し、被爆の実相を学ん



松島圭次郎氏の被爆体験証言を聴講

だ後、リーパー当財団理事長から二〇二〇年までの核兵器廃絶に向けた取組について話を聞きました。

二日目は、松島圭次郎氏の被爆体験証言を聴講し、その後、原爆死没者慰霊碑へ献花しました。

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、原爆を題材とした詩の朗読に耳を傾けるとともに、自らも詩を朗読するという体験を通して、被爆者のメッセージへの理解を深めました。

最後に、広島平和研究所の연구원と、戦後復興や被爆者問題など、戦後広島が直面した問題について意見交換を行いました。

今回参加した一行の国籍は、イスラエル、イギリス、インドネシア、アメリカ、カナダ、ネパールと様々であり、それぞれの国の視点からの質問もなされ、活発な質疑応答の場となりました。

旧の日本文化に触れるとともに、平和問題について学ぶというものです。

広島での滞在期間中、一行は、広島平和記念資料館や国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の見学、被爆体験証言者による被爆証言の聴講、広島平和研究所の연구원との意見交換会、平和記念公園内を巡るフィールドワークなど、様々な内容の平和学習を受講しました。

二〇二〇年六月現在、「広島・長崎講座」は国内二十九大学、国外十五大学の計四十四大学で開設されています。

（平和連帯推進課）

## ミネソタ州立大学の「広島・長崎講座」現地学習 広島との若い世代との交流で学ぶ

三月十五日（月）～十七日（水）、米国・ミネソタ州立大学ムアヘッド校の学生十三名が、二〇〇六年、二〇〇八年に続き、三回目となる広島での現地学習を実施しました。

この講座は同校が開設している「海外学習講座」の一つで、被爆地広島への訪問を通して新

中でも特筆すべき点は、今回ミネソタ州立大学側から、広島

の若者と交流して彼らの考えを聞きたいという要望があり、安佐南区の広島市立高取北中学校の訪問や、地元大学生との意見交換会を実施したことです。

広島市立高取北中学校では、はじめに全校生徒二百五十名が体育館で十二グループに分かれ、各グループで、米国学生を中心に、オバマ大統領のプラハ演説の一部を英文で読むという授業を行いました。授業の最後に、それぞれのグループ代表が全校生徒の前で練習成果を発表しました。

その後はそれぞれの教室に分かれ、米国学生が映像や写真に



広島市立高取北中学校での授業の様子

よって楽しく米国文化を紹介しました。

また、日米大学生による意見交換会では、広島経済大学、広島市立大学の両大学から十一名の参加があり、四つのグループに分かれて「なぜ原爆が投下されたのか」、「若い世代が平和な世界を目指して何をすべきか」などのテーマで活発な意見交換を行いました。

現地学習終了後も日米の学生らは引き続き交流を深めました。

（平和連帯推進課）

広島平和記念都市建設法制定60周年記念企画展

佐々木雄一郎写真展 第二部

# 平和を誓う

7月12日(月)まで  
平和記念資料館で  
開催



昭和27年(1952年) 平和記念式典

ヒロシマの惨禍と復興の軌跡をカメラで追い続けた広島市出身の写真家佐々木雄一郎氏(一九一七〜一九八〇)の写真展第二部を開催しています。

原爆が投下された時、東京でカメラマンの仕事をしていた佐々木氏は、終戦後間もなく広島に帰り、変わり果てた故郷の撮影を始めました。写真店を経営するかたわら撮り続けた写真は、三十余年で十万余にのぼります。

広島平和記念資料館は、平成十九年十二月から平成二十一年六月にかけて、佐々木氏のご遺族から初期プリント約二千二百点と六万点を超えるオリジナルフィルムの提供を受けました。現在、画像と関連情報のデータベース化を進めているところです。

その成果を反映させながら、広島平和記念都市建設法制定六十周年を迎えた平成二十一年度の企画展として、広島戦後史の記録とも言える佐々木氏の写真を二部構成で紹介しています。

第一部「平和を築く」では、被爆直後から昭和三十年ころまでの一〇年間を中心とする街と暮らしの復興の歩みを、百一点の写真で紹介しました。



昭和33年(1958年)「原爆の子の像」の除幕式

## ■第二部の見どころ

第二部「平和を誓う」では、昭和五十年ころまでの三十年間を、犠牲者の慰霊や被爆者援護の問題、被爆体験継承の動きなど、百二十点の写真で振り返ります。

日々の暮らしに安らぎと活気が戻っていく中で、残された人々はそれぞれの苦悩を背負いながら、犠牲者を悼み、心から平和を願いました。

佐々木氏が半生を費やして撮影した写真から、「他の誰にもこんな思いをさせてはならない」という被爆者の言葉が、どれほど悲痛な叫び、切実な願いであるかを感じ、平和への誓いを新たにしてください。

## 【展示構成】

■原爆ドームが見たヒロシマ(ヒロシマの復興を見守る原爆ドーム)  
■ヒロシマで何が起きたか(廃虚と化した広島、再建に立ち上がる人々)

■平和の訪れ(子どもの遊びと笑顔、祭りや行事に沸く市民)

■耐えて生きる(肉親を失った子どもや老人、被爆者の身体と心に残る傷跡)

■悲しみと決意(残された遺骨、焼け跡に立つ供養塔、八月六日の式典)

■語り継ぐために(被爆資料の保存、原爆ドームの保存)

■ヒロシマの願い(核兵器廃絶への動き、静かな祈り)



昭和26年(1951年) 下校する児童

## 【お問い合わせ】

平和記念資料館学芸担当まで。

☎(082)241・4004

# 平和記念資料館資料 調査研究会研究報告 第6号を発行しました

広島平和記念資料館資料調査研究会の調査研究活動の成果をとりまとめた『広島平和記念資料館資料調査研究会研究報告』第6号を発行しました。執筆者と論文のテーマは次のとおりです。

- ◆石丸 紀興（広島国際大学工学部 教授） 世界における戦災都市の戦災地図に関する研究
- ◆葉佐井 博巳（広島大学名誉教授） ヒロシマを語り継ぐ
- ◆水本 和美（広島市立大学広島平和研究所 教授） ブッシュ政権の退場と新たな序曲――二〇〇八年の核をめぐる動向と論調――
- ◆横山 昭正（広島女学院大学名誉教授） 『市民が描いた原爆の絵』における防火水槽―画中の説明を中心に―

研究報告は広島市内の図書館



『市民が描いた原爆の絵』における防火水槽から  
作者 小野木明さん

でお読みいただくことができます。希望者（先着百二十部）には、無償配布いたします。着払いでの郵送も可能です。

### 【お問い合わせ】

平和記念資料館学芸担当まで。  
☎（082）241・4004

## 「被爆体験証言者 交流の集い」研修会

本財団が事務局を務める「被

爆体験証言者交流の集い」では、被爆体験証言者をはじめ、広く市民の皆様を対象に、原爆被害の実相を中心に、ヒロシマについて学ぶための公開講座を年二回開催しています。

平成二十一年度の第二回目の公開講座は、二月十四日（日）、「はだしのゲンと私」漫画でヒロシマを伝える」をテーマに、漫画「はだしのゲン」の作者である中沢啓治さんに、ご自身の被爆体験とともに、自伝的な作品「はだしのゲン」のエピソードを紹介していただきました。講演後、アニメ映画「はだしのゲン」の上映も行いました。

### 「原爆は骨までも奪うのか！」

原爆による障害で苦しむ小さなお母さんを火葬した時、小さなお骨しか残らなかったことがきっかけで、中沢啓治さんは原爆をテーマにした漫画を描き始めました。ゲンは広島で被爆し、家族を亡くしながらも力強く生きていく少年です。中沢さんは、ご自身の被爆体験をもとに描いた「はだしのゲン」を通じて、原爆の悲惨さと平和の大切さを訴えています。この漫画は国内だけでなく、多くの外国

語に翻訳され、世界各国で読み継がれています。

最近、中沢さんは、白内障による視力の低下により、漫画家としては引退されました。今後は絵画を通して原爆の悲惨さを訴え続けて行かれます。

当日は三百名に及ぶ参加者で、会場はほぼ満席となりました。若い世代や親子連れの参加者も多く、参加した小学生からは「戦争は絶対におこしてはいけないんだな、と思った」との感想が寄せられました。今回の公開講座を通じて、幅広い年齢層に対して被爆体験の継承・普及を図ることができました。

（平和記念資料館啓発担当）



第2回公開講座の様子

## 被爆資料、原爆死没者の氏名・遺影、被爆体験記募集 被爆体験の継承にご協力を

広島平和記念資料館と国立広島原爆死没者追悼平和祈念館は、被爆体験を継承するための貴重な資料の収集を行っています。皆様の御協力をお願いいたします。

- 被爆資料―被爆された時に身につけられていた衣服など、被爆の事実を直接ものがたる実物資料。
- 氏名・遺影―原爆死没者の氏名・遺影（氏名のみ登録も可能）。
- 被爆体験記―被爆者の体験記や、遺族・友人の追悼記など。

### 【お問い合わせ】

被爆資料について―広島平和記念資料館 学芸担当まで。  
☎（082）241・4004  
氏名・遺影、体験記について―国立広島原爆死没者追悼平和祈念館まで。

☎（082）543・6271

# 平成22年度追悼平和祈念館企画展

## しまってはいけない記憶 —国民義勇隊と建物疎開—

■期間—平成22年4月1日～12月28日まで  
 ■場所—追悼平和祈念館 地下1階 情報展示コーナー  
 ■入場—無料

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、被爆の実相をわかりやすく伝えるため、毎年テーマを定めて企画展を開催し、被爆体験記や追悼記などを紹介しています。今回の企画展は、七月から開催される広島平和記念資料館企画展との共同企画展と位置付け、「国民義勇隊」を共通のテーマにして開催しています。

十万編を超える収蔵資料（体験記）の中から、義勇隊として出動して被爆した方や、その救援、看護にあたった方の体験記二十八編を紹介しています。「国民義勇隊

昭和二十年三月に国民義勇隊を組織することが閣議決定された後、食糧増産・建物疎開作業や補助的な軍事活動などにあたるものとして、地域や職域ごとに編成されました。」

昭和二十年八月六日、広島市では、市内および周辺町村や職場から多数の国民義勇隊員が出動し、動員生徒たちと共に建物疎開の作業に参加していました。

原子爆弾がさく裂し、突然の出来事に逃げ惑う隊員たち。救援隊を送り出す地域や職場の混乱。じっと待つ家族や同僚の不安。そして、変わり果てた姿で帰ってきた隊員への必死の看護。体験記にはそれぞれの状況や思いがこぼれ出ています。

会場では、体験記とあわせて、被爆者が描いた絵や衣服などの被爆資料も展示しています。また、体験記を、関連する写真や絵を用いた映像と音声で紹介し、被爆の悲しさを訴えています。この映像については、過去の企画展で制作したのもも含め、体験記閲覧室でも観ることができます。

今回、展示している被爆体験記の中から、伊藤サカエさんと妹尾治人さんの体験記（抜粋）をご紹介します。

……瞬間、後背よりの閃光のため衣類が燃え出し、ためらう中に家の下敷になり、気がつき十分位して下敷から這い出して外に出た時、周囲は全部ダイタイ色の空気で何も見えなかった。少したってあたりの空気が晴れた時、ヒロシマの街は消えて無くなっていった。当時二班の五十名の隊員を点呼して矢野へ帰るよう命令した。その時の一緒に行った町内の人々は、ツルツルに顔から全身焼きたぐれ、皮膚が下っていた。面相が変わって誰か分らない位だった。

隊員を帰えした後、私は一人残って下敷の町内の人を掘り出すために救援に来た兵隊に頼んで二人掘り出してもらい、主人と大八車に死体を乗せて大洲の里迄、帰った。大洲橋を渡る時は、もう死体が浮いて流れていた。主人は里の工場から私を探しに来て出会った。夕方、矢野の国民学校を帰った時、学校の各教室は収容場となり、全身焼けた人やケガ人がいっぱい驚いた。つける薬もなく、油も

なく、私は自分の背中の皮を切りとってもらって、責任のため走りまわ（っ）て手配した。毎日、毎日、何十人と死んで行った。……

妹尾さんは職域義勇隊の一員として建物疎開作業に従事し、集合場所待機中に被爆しました。

……八時十五分、運命の原子爆弾第一号が投下された。原子爆弾のことを「ピカドン」とは良く言い表した言葉で、最初にピカッと写真のフラッシュをごく近距離で浴びたような猛烈な光線が走り、座っていた黒塗りの縁側の板が真っ白に見えたのを覚えている。そして二秒位して今度はドーンと大きな爆発音と共に家屋が倒れた。その瞬間、塵埃で真っ暗になり何も見えない。目をやられたのか真っ暗で何がどうなったのか全く判らない。十秒位して夜明けの如くぼんやりと視界が開けてきた。爆風で座っていた場所から数メートル飛ばされて腰に

打撲傷を受けたが外傷はない。目もやられていない。周囲を見れば見渡すかぎり木造の家は倒れている。市役所は窓は吹き飛ばされているが建物は残っている。

普通の爆弾一発ではせいぜい数軒が破壊される程度なのに、この被害はどうしたことか。とてつもない超大型爆弾が投下されたものに倒れ、その家の壁の下から黒川さんのうめき声がする。……

この体験記の全文および企画展の内容は、当館の体験記閲覧室もしくはホームページ（<http://www.hiro-tsuitokinenkai.go.jp/notice/info.php?id=11&from=top>）をご覧ください。



# 観光事業従事者研修会 第十回「ヒロシマ」 ガイド」を開催

三月十二日（金）に広島平和記念資料館などで第十回「ヒロシマ・ガイド」を開催しました。

この事業は、広島平和記念資料館や平和記念公園などを案内するバスガイドや観光タクシードライバーら、ガイド業従事者の方々に対象として、広島への来訪者に、被爆の実相や核兵器廃絶と世界恒久平和を願う「ヒロシマの心」を正しく伝えてもらうため、学習の機会を提供するもので、広島県内の十二社から八十三人の参加がありました。平成十三年度から開催しており、今回で十回目です。

研修では、本財団の被爆体験証言者 岡田恵美子さ



ヒロシマピース ボランティアから、平和記念公園内の解説案内を受ける研修会参加者

んの講話を聞いた後、ヒロシマピース ボランティアによる広島平和記念資料館内や平和記念公園内の案内解説を受けました。続いて、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を訪れ、同館職員による館内の説明や、朗読ボランティアによる被爆体験記の朗読を聴きました。

終了後、参加者からは「このような機会を設けていただき大変勉強になった」、「今後ともぜひ続けていただきたい」などの感想が寄せられました。

（平和記念資料館啓発担当）

## 「原爆展」から平和を願う

JICA国際協力推進員からのメッセージ

JICA（独立行政法人 国際協力機構） 国際協力推進員

植松 弥穂



はじめまして。二月一日付で「独立行政法人国際協力機構（JICA）中国国際センター」から広島平和文化センター国際交流・協力課に「広島市国際協力推進員」として配置されております。

JICAは、政府のODA（政府開発援助）事業の実施機関として、様々な形で開発途上国支援を行っています。外国からの研修員の受入れ、有償、無償の資金協力、技術協力などを通して、開発途上国が抱える問題解決を支援しています。技術協力のうち、最も知られているのが「青年海外協力隊」の派遣です。「国際協力推進員」は、そうした取り組みを行っているJICAの事業を地域の皆さんに知って頂くための広報・啓発活動、学校や地域などで行われる国際理解教育のお手伝い、また、海外ボランティア活動に参加したい、興味があるといった方々の支援等を仕事としております。

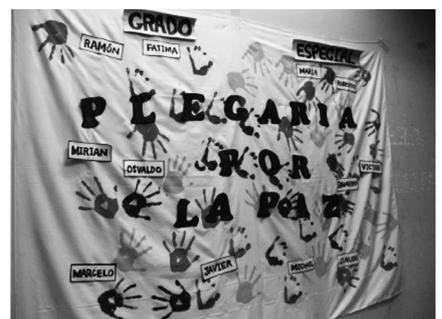
私も青年海外協力隊員として一九九七～一九九九年まで、JICA事務所調整員として二〇〇六～九年まで、南米のパラグアイという国に滞在していました。パラグアイは日本の裏側にあり、派遣国の中では一番遠い国なのですが、日本との関係は深く、親日国として有名です。

その背景には、一九三六年以降、多くの日本人移住者を受け入れてきたという経緯があります。広島からも多くの方が海を渡られました。二〇一〇年現在も二世三世を含む約七千人の日系人が居住し、深い信頼を得て国に根付いています。

パラグアイでは二〇〇六年以降、協力隊員によって継続的に「原爆展」が開催されていますが、毎回多くの来場者があり、日系人の方も足を運んで下さいます。戦争の歴史を持つパラグアイですが、それを知らない若い世代が増えています。そんな若い人達にも「原爆展」を通して「ヒロシマ」の歴史を伝える事で、平和な世界を願う気持ちが育ち広がっていることは、反響の大きさからも十分感じられます。

パラグアイだけでなく、世界中で活動中の多くの協力隊員が、同じ思いで、今も「原爆展」を開催し続けています。「原爆展」を通して、平和を願う気持ちが世界中に広がるようにと願っています。

そんな隊員の活動を精一杯後方支援することも、「広島市」国際協力推進員の大切な役割の一つとして、これから頑張っていくかと思っています。



原爆展に参加したパラグアイの子供たちがヒロシマに寄せたメッセージ「戦争はだめ！平和を！」

# 国際理解セミナー 途上国で国際貢献 「地球で働く。海外 ボランティアのカタチ」

二月七日(日)午後一時から三時三十分まで、広島市留学生会館で「国際理解セミナー」を開催しました。主催―本財団。後援―独立行政法人国際協力機構(JICA)中国国際センター。

JICAからシニア海外ボランティアとして派遣された森行勅介さん、青年海外協力隊として派遣された鍵山彩さんによる活動等についての講演やワークショップを行い、市民の国際交流・協力への理解と関心を深めました。

## 【任国・活動の紹介】

**森行さん**  
重工業会社へ勤務した後、ドミニカ共和国及びパナマ共和国で、安全衛生、消費者保護等のシニア海外ボランティアの活動をサポートするため、配属先との調整・通訳を行いました。

また、ホンジュラスでは、地下土木、測量等のシニア海外ボランティ



アンコールワットで写生大会をする鍵山さん(左端)

アと共に、マヤ文明遺跡のピラミッドの保存統合プロジェクトに参画しました。

## 鍵山さん

教員が身分を保持したまま青年海外協力隊へ参加する制度により、カンボジアの小学校教員養成校において、音楽や図画工作等の情操教育分野で、生徒の指導や教員の研修等を行っていました。

また、カンボジアの人々が伝統を敬う姿に強く惹かれ、生徒と共に伝統文化や楽器の練習にも取り組みました。

## 【ワークショップ】

### 鍵山さん

「聞いて見て、体験しようカンボジ

ア」と題して、写真と音でカンボジアの日常を感じたり、現地の踊り・挨拶・言語の発音、カンボジアに関するクイズに挑戦しました。

百人の参加者からは、シニア海外ボランティアについて理解が深まった、視覚的で大変わかりやすかった、参加型で大変有意義かつ興味深かった、身近で出来ることから実践していこうと思った、との感想が大変多く寄せられました。

(国際交流・協力課)

# バン格拉デシユ NGO メンバーの受け入れ 教育現場などで 実地研修

当センターは、次代の国際交流・協力活動の担い手を育成するため、平成十三年度より市内に通勤通学する青少年をバン格拉デシユに派遣する「青少年国際交流・協力スタディーツアー」を実施しており、これまでに八回、計九十七名を派遣しています。

このスタディーツアーでは、広島からの支援で設立された小学校や幼稚園を現地で運営するほか衛生環境

の向上など幅広い活動を行っている NGO 団体 PHMS (パールス) がサポートしてくれています。

平成二十一年度には、広島からの支援をより効果的なものにするためこのパールスのメンバー四名を広島に招へいし、日本の実情調査や広島でバン格拉デシユの支援を行なっている団体との協議の機会を提供しました。

来広したパールス代表のアブ・ムルシユッド・チョウデユリー氏ほか一行四名は、平成二十二年一月三十一日(日)から二月十一日(木)までの十二日間、広島に滞在し、平和記念資料館やマツダ宇品工場、廃棄物処理施設の見学のほか、小学校、幼稚園の訪問、お好み焼き体験、市民団体との協議などを行いました。

平和記念資料館では核兵器廃絶、世界平和に向けた広島市の施策について学ぶとともに、被爆体験証言者の講話を通じて被爆の実相についての理解を深め、平和を求める思いが高まったようでした。

幼稚園、小学校などの教育現場や、障害者自立支援施設及び西部リサイクルプラザでは、バン格拉デシユでも容易に実践できそうな事について、熱心に担当者に質問していました。

支援団体との会合では、これまで



幼稚園を訪問して園児と交流

の支援を総括するとともに、今後の支援内容について双方の要望を出し合いながら熱心に議論し、また、メンバー来広を知ってわざわざ駆けつけられた団体と新たな支援について打ち合わせもできるなど、今後に向けて大変多い機会となりました。ちょうど日本でも一番寒い時期にあたり、また、不慣れな環境から若干体調を崩したメンバーもいましたが、バン格拉デシユ支援者の皆さんの手厚い協力により無事に旅程を終えて帰国されました。

当センターでは支援団体の皆さんと連携を図りながら、今後も、より良い国際交流・協力事業を実施してまいります。

(国際交流・協力課)

# 平成二十一年度「資機材の供与」 中古ごみ 収集車を寄贈

国際平和文化都市を都市像として掲げる広島市は「つくりだす平和」の一環として都市レベルの国際協力を推進し、アジア地域の平和と発展に寄与することを目的に、被爆五十周年にあたる平成七年度に「ひろしま国際協力基金」を創設しました。

平成八年度からは、この基金の運用益を活用して、アジア地域の自治体から毎年研修員を受け入れると同時に、中古作業車両などを寄贈しており、当センターは保有するノウハウを活かして寄贈にかかる業務を広島市から受託しています。

平成二十一年度は、平成二十年度に受け入れた研修員の派遣元である南アジアの国、ブータン王国のティンプー市に、中古ごみ収集車一台と、その関連部品を寄贈しました。

今年度の寄贈車両は、平成

九年から平成二十一年八月まで中区内でごみ収集をした車両です。

長年の使用により激しく傷んだ車両を、限られた予算で効率的に整備することは大変な労力を要しますが、自動車整備の資格を持ち、長年本業務にたずさわっている職員の指揮の下、車両の機械系統、内外装などの整備、修復を念に行いました。

寄贈にかかる諸手続きの実施後、車両を載せた船は平成二十二年二月五日（土）に広島港を出港、神戸港、インドのコルコタ港を経由し、コルコタ港からは陸路を自走してティンプー市に向かい、三月二十四日



寄贈した車両とティンプー市職員の皆さん

（水）、同市に到着しました。

現地では、市関係者が早速車両の試運転などをして、本格使用に備えました。前年度に研修員として広島市を訪れ、今回の寄贈について両市の連絡調整役を務めた、ティンプー市職員のアジソン・ジャムショーさんからお礼の連絡がありました。

なお、本事業はこれまで七ヶ国九都市へ、中古の消防車、バキューム車及びごみ収集車を計十九台、また、これら車両の交換用部品を寄贈しています。

（国際交流・協力課）

## 第四回「留学生と地域のみなさんとのふれあいコンサート」の開催

広島市留学生会館では、二月二十七日（土）、二階ホールにおいて「留学生と市民とのふれあいコンサート」を開催しました。

昨年度第四回目のコンサートは、音楽を通して、留学生と日ごろお世話になっている地域

のみなさんとの交流を深めることを目的として開催しました。今回は中国重慶市出身の国際交流員が司会進行をし、百十三名の参加者と四十八名の出演者が、留学生を交えて楽しい一時を過ごしました。

第一部は地元小・中学生を中心に結成されたHEROグループの元気な踊りで幕を開けました。次に、小学生によるピアノの演奏、熱心に練習をされている女性コーラスグループによる合唱など、地元荒神地域の音楽愛好家が日頃の練習の成果を発表されました。演奏の合間に銭太鼓や安来節（ごじょうすくい）の披露があり、留学生は日本の伝統芸能に触れることができました。

第二部は、エリザベト音楽大学大学院在籍中の韓国人留学生三名によるクラシック演奏で始まり、ウェバー作曲の三重奏（フルート、チェロ、ピアノ）を楽しみました。最後にフィリピン人留学生二名（サキソフォン・ドラム）と日本人二名（ピアノ・コンガ）が共演し、オリジナル曲や

JAZZの名曲を交えたプログラムを熱演しました。クラシック演奏の会場が一転、ライブハウスのような雰囲気になり、観客の拍手喝さいで音楽会は終了しました。

参加者のアンケートでは「留学生の演奏者はプロ並みの実力でびっくりした。」「いろいろな演目があり楽しかった。」「またぜひ参加したい。」「などの声をいただき、大変好評でした。これからも、地域の皆様と留学生が音楽を通じて一層の親睦を深めるため、心温まるコンサートを開催していきたいと思っています。

（広島市留学生会館）



フィリピン人留学生のドラムとサックスの熱演

## 生活支援セミナー

### 「新規入居者を迎えて」

広島市留学生会館では、今年度四月新規入居者を対象に、留学生会館での生活に早く適応できるように、四月四日(日)午前十時から午後一時三十分まで「新規入居者を迎えてのオリエンテーション」を行いました。

四月一日、二日に入居したばかりで、会館の生活規則や居室料の支払い方法、主な施設の利用方法等に不案内な新規入居者に、具体的な説明を行いました。参加者は韓国、中国、中国(台湾)、ベトナム、ネパール、タイ、インドネシア、ラオス、ケニアの八か国・一地域からの留学生で、八大学・一専修学校に所属する三十八名でした。

最初に留学生会館職員を紹介し、その後に西村館長より歓迎の言葉と、『お互いを尊重・理解して暮らし、会館規則を遵守する』ように。また、留学生会館は単なる宿舎ではなく、留学生

相互の交流や市民との交流等の国際交流の場である』との言葉がありました。続いて担当者が、生活ガイドパンフレットに基づき、各種の届け出、門限、訪問者を招く時の手続き、事務室との連絡等を説明しました。ゴミ

の分別については、各種のゴミを見せながら、分別方法を実演しました。さらに、緊急事態に遭遇した場合の対処法を詳しく説明しました。特に、交通事故に遭った場合に安易に考えず、内容がわからないままに示談書等に押ししないように説明しました。また、会館施設・什器・備品の扱いについても、入居者には原状回復義務があり、弁償が必要になることがあるので、使用する際には丁寧に使用するよう説明しました。

次に、殆どの新規入居者が自転車を使用するので、その登録方法、駐輪場所の指定等を、実演しながら説明しました。時間が限られていたため、全てを詳細に説明することはできませんでしたが、参加者には必ず生活ガイドパンフレットを全て読むように要請し、今後は会館規則を理解してい

るとの前提で日常の対応を行う旨を説明しました。

説明の後、出席者が一人ずつ自己紹介を行いました。その後二班に分かれて会館施設を視察しました。特に地震・火災時の避難経路について詳しく説明し、非常階段の開け方や、災害時にはエレベーターを使用しないこと等を、念入りに注意しました。

十一時三十分からは、(社)日本産業退職者協会広島支部の皆さんにお願いして、広島駅周辺のスーパーマーケットや生活に必要な施設の場所を案内していただきました。一時間しか時間が取れなかったため、急ぎ足での案内となりましたが、この間、広島支部の皆さんと留学生との交流もありました。十二時三十分から午後一時三十分までは、新規入居者にとっては、ある意味、一番関心の高い、インターネットの申し込み方法について説明会を行いました。

(広島市留学生会館)

## Yes!キャンペーン 実行委員会活動報告

### 延本 真栄子 委員長に聞く

平成二十二年五月十一日

Yes!キャンペーンは平和市長会議が発表した『ヒロシマ・ナガサキ議定書』の今年五月の核拡散防止条約(NPT)再検討会議での採択を目指し、昨年七月から活動してきましたが、今年六月に実行委員会としての活動を終える予定です。

具体的な活動内容としては、全国の自治体を巡って『ヒロシマ・ナガサキ議定書』への賛同を集めるキャラバン隊と、それを支える『ヒロシマ・ナガサキ議定書を読む絵本』の制作販売を行ってきました。

キャラバン隊は千七百五十一の自治体内、六割強にあたる千百五十九の自治体の首長の方々から署名を集めました。時には訪問先の首長様が活動に理解を示し、カンパして下さいたり、訪問した被爆者に「職員に被爆体験を聞かせてほしい」と講演を依頼されたこともあり、大変励みになり

ました。また、民間の活動としては大変稀なことですが、本年四月二十二日には、集まった署名を武正公一外務副大臣に直接お会いして手渡すことが出来ました。

キャラバン隊の活動費は『ヒロシマ・ナガサキ議定書を読む絵本』の売り上げでまかなわれました。この絵本は議定書の内容を小さな子供にも分かりやすく解説するもので、イラストレーターの黒田征太郎さんの協力のもとに作成され、キャンペーン事務局がワンコイン(五百円)で売りしています。予想を超えて様々な方々に興味を持って頂き、これまで一万七千冊以上のご希望がありました。

さて、本番のNPT再検討会議では、残念ながら議定書が採択されることはありませんでしたが、五月四日の各国一般演説での日本の演説にて、福山哲郎外務副大臣が「ヒロシマ・ナガサキ議定書」について言及しました。これは四月二十二日に行った申し入れの結果だと考えています。

NPT再検討会議期間中は現地のニューヨークでも様々なイベントを行いました。詳しくはホームページをご覧ください。

<http://yes.hiroshima-nagasaki.net/>



**プロフィール**  
**【アレクサンダー・メヒア】**  
 2009年10月からユニタール広島事務所長。金融、外交、公職、学問研究など幅広い職歴を持つ。アメリカの金融機関(銀行)にて7年間勤務した後、1998年から外交官としてのキャリアを開始。その後2001年にエクアドル共和国の経済副大臣、世界銀行総裁に任命される。2003年にアメリカに移り、ワシントンのインター・アメリカン・カウンシルでアンディーン・プログラムのディレクターを務め、2005年にアトランタの国連訓練センター所長としてユニタールに着任。さまざまな大学で教鞭をとり、記事など掲載多数。CNNネットワークなどの主要テレビ局のインタビューも多数受けている。コスタリカのINCAE大学から財政学の修士号を、米国、ワシントンのジョージタウン大学から外交問題の修士号を取得。現在は、妻と3人の娘と広島に住んでいる。

“平和について思う”

広島の地であらためて  
 平和について考える

ユニタール広島事務所 所長  
 アレクサンダー・メヒア

オックスフォード英語語源辞典によると、平和という言葉は、「戦争、動乱もしくは衝突のない、静かで穏やかな調和」を意味します。戦争の惨禍によって世界中に知られるようになり、世界の多くの人々が、今日の広島を平和の象徴としてのみならず、地上でもっとも平和的で調和のとれた街とみて

いることは歴史の皮肉ではないでしょうか。八月六日の朝、空からホロコーストが降ってから、わずか六十四年で見事に復興し、豊かに発展した活気ある街へと生まれ変わっただけでなく、地球の聖地の一つとなり、内外から来た多くの人々が動き、暮らし、学ぶ、豊かな緑と静かに流れる六つの川が織り

なす平和を謳歌する知識のメッカになつたのです。戦争の破壊や恐怖の跡が、さまざまな形で平和の姿をとっていることは称賛に値します。このすばらしい成果を達成するために、戦後から今日まで多くの闘士が活躍してきました。その一人が広島へのオリンピック招致を提案した秋葉忠利市長です。私はオリンピック開催都市の一つであるアトランタに四年あまり住んでいたことから、この平和の祭典が都市にもたらす恩恵がいかに大きいかを証明できることは言うまでもありませんが、むしろ、オリンピックがもたらす絶大な経済効果にポイントを置くべきかもしれません。私は、秋葉市長は、核兵器廃絶と核兵器のない世界のために戦う闘士として、未来に対してきわめて重要な役割を演じている都市の、究極のゴールを構想されているのではないかと思っています。仮にオリンピック委員会に広島が選出されるとすると、広島は世界の平和キャンペーンを率いる被爆都市であるだけでなく、復興、平和への取り組み、そして夢のオリンピックという類いまれな組み合わせを結合できる唯一の都市になれるのです。

広島での国際連合の任務を命ぜられ、二カ月で引き継ぐ準備を始める必要があると通知するジュネーブからの電話を受けた日、私はアトランタにあるオフィスに居ました。二〇〇九年八月初旬の暑い夏の日で、私はしじみじみと幸福感に浸ったことを覚えています。歴史や文化に対する認識が深まり始めたティーンエージャーのときから、私は日本に住みたいと思いつけていたのです。その夜、妻と子どもたちとこのニュースを告げたとき、彼女たちは、広島ではどのような暮らしが待っているのかと尋ねました。私はためらいなく、国連の同僚から「平和な」暮らしだと聞いていると答えたものでした。この美しい街に半年あまり暮らしてみても、その言葉は私にとって多くの意味を持つようになり、この言葉を使うたびに、一瞬とまどいを覚えるようになりました。

広島は平和です。この街の生活レベルは非常に高く、まるで樂園で暮らしている気持ちになれるほどです。それにもかかわらず、このようなぜいたくに慣れてしまうと、その本当の価値を忘れてしまい、あたりまえだと思ってしまうようになります。広島は平穏さと日本社会の安定を、無秩序で危険な、世

界の多くの都市と比較しようとするとき、私は思わず目を閉じて、どれほど多くの違いを享受しているかを考えずにはいられません。広島の人々にとって特に身近なケースが一件あります。何千キロも離れたところで戦時を生き抜いている市民を支援するパートナーシップを七年間行っているケースです。アフガンニスタンにあるカブールと、アフガニスタン奨学プログラムのことです。

広島は平和です。この街の生活レベルは非常に高く、まるで樂園で暮らしている気持ちになれるほどです。それにもかかわらず、このようなぜいたくに慣れてしまうと、その本当の価値を忘れてしまい、あたりまえだと思ってしまうようになります。広島は平穏さと日本社会の安定を、無秩序で危険な、世

最近、湯崎知事と交わした会話の中で、知事が就任直後に訪問を受けたアフガン人の一人に、何か特別な印象を持ったと聞いて軽い驚きを感じました。三十年あまりにおよぶ戦闘で険しくなっていた彼の瞳に、信頼と希望を見たというのです。知事のおっしゃることは正しいと思います。アフガン人を広島に連れて来るたびに、私も同じ感想を持つからです。彼らは広島を訪問し、戦争の後には平和が、破壊の後には復興が、絶望の後には希望があるということを理解するのです。彼らは信頼を取り戻し、ヒロシマの大使、つまり、平和の大使になるのです。

昨年、アトランタで妻と娘たちに広島は平和だと語ったとき、私は平和というものをわかっていなかったと思います。しかし今、私はその意味を実感しています。私たちは平和を継承し、世界平和の実現に取り組んでいるだけではなく、未来の平和の鍵を握っていると思います。今私は、今後も平和に暮らしていけるであろうことを確信しています。それが原爆の残した遺産のうち一つの側面なのです。一九四五年八月六日に非業の死を遂げられた犠牲者の子孫たちは、平和な都市を後世に残し、全力で戦争を防ぐ責任を担って行きます。その子孫たちは、平和は自然に発生するものではないと、世界に絶えず訴え続けるヒロシマの大使なのです。自分の子供たちを育てるのに、これ以上の場所があるでしょうか？ この平和な都市に住むことができるのは、私にとって、私の家族にとって特別な恩恵なのです。

最近、湯崎知事と交わした会話の中で、知事が就任直後に訪問を受けたアフガン人の一人に、何か特別な印象を持ったと聞いて軽い驚きを感じました。三十年あまりにおよぶ戦闘で険しくなっていた彼の瞳に、信頼と希望を見たというのです。知事のおっしゃることは正しいと思います。アフガン人を広島に連れて来るたびに、私も同じ感想を持つからです。彼らは広島を訪問し、戦争の後には平和が、破壊の後には復興が、絶望の後には希望があるということを理解するのです。彼らは信頼を取り戻し、ヒロシマの大使、つまり、平和の大使になるのです。

# 平成21年度 海外からの来訪者が 発信するメッセージ

広島平和記念資料館には毎年、海外から著名な方々が訪問され、平和への思いを芳名録に記帳されています。二〇〇九年度に訪問された方々のメッセージを一部、紹介します。(敬称略)

二〇〇九年五月一四日  
セツラン・ラーマナタン・ナザン  
シンガポール共和国大統領

「被爆地ヒロシマへの訪問は、私たちが代表団にとって感動的な経験でした。私たちはヒロシマの痛みを感じています。この痛みが



人々の記憶の中に生き残り、ヒロシマを超えて人類に対する警告者となることを願います」

二〇〇九年八月五日  
マハティール・ビン・モハマド  
マレーシア元首相



「この資料館はあらゆる人々に現代の戦争の脅威を思い出させるため、多大な努力をされています。」

展示を見た人々が平和の必要性を認識することを望みます。このようないかなる悲劇が決して人類により人類に対し行われることのないよう祈ります」

二〇〇九年八月七日  
ミゲル・デスコト・ブロックマン  
第六三回国連総会議長



「二九四五年八月六日の残虐行為を引き起こした人間の放漫さにより犠牲となった無実の人々すべてに心からの愛と連帯を捧げます。私たち皆が、地球上の核兵器全廃に向かう精神的な強さを、彼らの犠牲の中に見出すことを願います」

二〇〇九年二月二日  
アブドゥル・ハミッド  
バングラデシュ国会議長



「広島島の歴史を伝えるこの資料館を見学し、非常に感動しました。私たちの意識に訴えかけ、平和へと駆り立てるものです。広島島の惨禍を伝えるために苦勞された方々に感謝申し上げます。深い敬意を表して」



「二九四五年八月六日は人類にとっ て忘れられない日となりました。人間の悪意の部分は、破壊と暴力を起こし得るといことが証明されたのです。私を含めパレスチナ国民は、広島と長崎に起きたこの惨禍に対し、大変心が痛んでいます。人類が破壊し、文明にも汚名をつけたのです。我々は日本の国民に起こった出来事を悼んでいます。この国民に対し行われた大きな犯罪を悼み、このような出来事が繰り返されないことが大切だと感じています。我々がこの経験から学び、訴えていかなければならないことは、世界は平和で安定な状況になければならないということです。そのためには、核兵器および大量破壊兵器のない世界の実現が大変重要なことです。今回は、私にとって初めての広島訪問でした。ここから日本国民の努力と意志に敬意を表したいと思えます。廃墟から復興へ、そして、このような経済大国を成し遂げたことに対し、

二〇一〇年二月七日  
マフムード・アッバス  
パレスチナ自治政府大統領

深い尊敬の念を抱いております」

二〇一〇年二月二日  
ワンガリ・マタイ  
ノーベル平和賞受賞者  
「広島・世界に平和が広がりますように」



二〇一〇年三月一九日  
ジョゼ・ラモス・ホルタ  
東ライモール大統領／ノーベル平和賞受賞者  
「原爆による犠牲者、また、第二次世界大戦で犠牲となったアジアから欧州すべての人々に哀悼の意を表します。人類が決して再びこのような残虐行為を目撃することを願います」



「二九四五年八月六日は人類にとっ て忘れられない日となりました。人間の悪意の部分は、破壊と暴力を起こし得るといことが証明されたのです。私を含めパレスチナ国民は、広島と長崎に起きたこの惨禍に対し、大変心が痛んでいます。人類が破壊し、文明にも汚名をつけたのです。我々は日本の国民に起こった出来事を悼んでいます。この国民に対し行われた大きな犯罪を悼み、このような出来事が繰り返されないことが大切だと感じています。我々がこの経験から学び、訴えていかなければならないことは、世界は平和で安定な状況になければならないということです。そのためには、核兵器および大量破壊兵器のない世界の実現が大変重要なことです。今回は、私にとって初めての広島訪問でした。ここから日本国民の努力と意志に敬意を表したいと思えます。廃墟から復興へ、そして、このような経済大国を成し遂げたことに対し、